

## 行為者が見ているものは何か：アリストテレスにおける行為の三段論法

村上，学

<https://doi.org/10.15017/1430737>

---

出版情報：哲学論文集. 31, pp.21-37, 1995-09-25. 九州大学哲学会  
バージョン：  
権利関係：

## 行為者が見ているものは何か

——アリストテレスにおける行為の三段論法——

村上 学

我々は時に、いかに生きるべきかと問い、よく生きたいと願う。もし、自分のものにしる他人のものにしる、ある行為が誤っていると分かったなら、我々はそれを反省しこれからはそうするまいと考えることだろう。

さて、反省するためにはその行為が説明できなければならない。そして、一般に「行為の三段論法」と呼ばれる説明の定式がある。考案者のアリストテレスによれば、普遍ないしは価値判断にかかわる大前提と個別ないしは可能性にかかわる小前提があり、それら二つのタイプの前提から行為（結論）が導きだされる。

誤っている行為、更には不正でよくない行為を非難し、今後のために修正を考える場合、なされうる提案の一つは一般的・普遍的価値判断にかかわる信念の入れ換えである。すなわち、間違っていたのは行為者が保持している大前提（にあたるもの）であり、それを改めることで、これからの行為は正しくなるというわけである。その場合、行為者の行為の傾向性は大前提において記述されるのであって、小前提にあたる個別の状況に対する認識は、いわば状況や対象の中立的なデータのように見なされている。大前提にあたる一般命題を何等かの仕方に入れ換えることができれば、その人は問題の行為を以後なさ

行為者が見ているものは何か

ず(1)にすむという算段である。

本稿では、このような大前提を入れ換えることで自らの行為を改めようというアイデア（以下「交換テーゼ」と呼ぶことにする）を導いてくるような行為の理解を検討することで、行為における知覚の役割を検討したい。そこで、まず交換テーゼの主張が含意する行為の理解を考察し、次に行為の生成の場面での行為の構造に注目することで交換テーゼを検討することにする。その過程では、個別の事柄にかかわる「見る」「聞く」「味わう」「触れる」等、一般に知覚と呼ばれる働き(1)の我々の行為における重要性を強調することになるであろう。そうすることで交換テーゼの限界ないし誤りも明らかになると思われる。

## 1

まず私が何を交換テーゼと呼び、その支持者であると考えられる人々がどのような立場をとる人であるのかはつきりさせておかななくてはならない。

交換テーゼの出発点は、同じ事物ないし事態（小前提）に対し、複数の違う行為が可能であり、その違いが行為者の持つ一般的・普遍的な法則についての信念ないし欲求（大前提）に依存すると見なすことである。そして、交換テーゼの内実は「大前提をよりよいものに入れ換える」というアイデアであるが、その提案は次の条件を承認することになる。

- ① 大前提は小前提から独立している。
  - ② 大前提がその行為の評価を担う。
  - ③ 小前提は中立なデータである。
- ①で「独立」というのは、大前提に示される欲求が小前提に示される個別の事柄（交換テーゼに従えばあるデータ）なし

行為者が見ているものは何か

に、アリストテレスの用語に従えば「現実化する」「現実態において働く」ということを意味しているのではない。あくまでも大前提と小前提にあたるものがそろうことで、結論としての行為が導かれる、というのが基本的な図式である。<sup>(2)</sup>①の「独立である」という条件は、③とともに、行為の評価が大前提だけで十分であるという②の条件を言うために必要なものである。すなわち、大前提が小前提を参照することなく、結論としてなされる行為の評価と行為者の態度を決める、ということが交換テーゼの中心である。

大前提が行為の評価を決めるということは、行為がその目的によって判定されるという事実から容易に導かれるようにみえる。ある行為においてそれが「何のために」というその「何か」を決定しているのは行為者にとっては大前提である、というわけである。この大前提自身の評価が定まらない場合、交換テーゼはより上位の前提に訴えることによって問題を解決することになる。すなわち、行為者が何かをなした場合、その行為の価値を計るとされる大前提は、より上位のより抽象度の高い価値判断を示した前提に照らして評価されるのである。そして「交換」の基準もここに存することになる。

より上位の価値を参照することで行為の評価を決めようとする議論に対する一番単純な反論は、なされる一連の行為(目的)とその部分にあたる行為(手段)との評価上の関連を指摘することであろう。<sup>(3)</sup>例えば、何かを獲得するという行為の中に、盗みを働くという手段が含まれていたとしよう。その場合、なされた一連の行為の評価は「手段」にあたる部分の評価に影響されないわけにはいかない。しかしこれらのことを認めたとしても、次の点で交換テーゼ自身は生き残るであろう。一つは、我々が問題にしているのはこれからの行為なのであるから、大前提に「不正をなしてはいけない」というような条件をつけ加えていくことで形式上誤りを回避できるように見える点である。交換テーゼにおいてはそうした大前提の「付加」もそのバリエーションとして数えることにおそらくなるであろう。二つ目は、問題となっているのが「盗みを働く」という記述の下での個別の行為であり、その行為の説明において誤りが見いだされるのは「盗みを働いてもよい」というような大前提である、と言えることである。そうであるなら、条件を付加したにもかかわらず起きてしまう手段における誤りは、上

位の価値ないし目的に適していない行為のタイプをその状況の中で思案し選んでしまったことに存する。その行為のタイプは大前提において表現される。以上のような立場を積極的に打ちだしているのは Cooper [1975]<sup>(4)</sup> である。

Cooper の解釈においては、行為の三段論法の伝統的な二つの区別、すなわち「規範—事例型」と「目的—手段型」という区別<sup>(5)</sup>は実質必要がない。しかしながらそれは Wiggins [1975] の提案とは違う仕方である。二つの区別を否定している。というのも、Wiggins は小前提にあたる個別の判断の役割を伝統的解釈よりも拡大することによって統一を図ったのに対し、Cooper は大前提の役割を強調し、そこに思案も含めたからである。Cooper にとっては、形式的にはあるが、行為の三段論法は「規範—事例型」と呼ばれていたものしかない。ところが、思案については、その形式はまさに「目的—手段型」であり、そしてそれがさらに大きく二つに区別されることになる。区別をしているのは、価値を表現する「目的」の階層的理解にしたがって、より上位の目的（「善」「美」「快」）から始まる思案と、より下位の目的（例えば「健康」「富」「家」）から始まる思案との間である。そして前者はそうした目的に適用するものとして「行為そのもの」が求められることになり、それこそが「行為」なのであるが、後者は行為とは別のものを目的とするのであり、この場合は「制作」であるという。この「行為それ自身を目的とする」ことを真の行為として強調する傾向はアリストテレスのプラクシス（行為）とポイエーシス（制作）の区別という厄介な問題<sup>(6)</sup>と運動している。しかしいづれにしても、下位の目的がさらに上位の目的によってその評価が測られるという点は同じである。すなわち、三段論法を統一的に解釈しようとする際、交換テーゼ支持者が行為の思案において訴えるものは、その行為者自身の持つより上位の価値の概念であったり観念である、ということである。

それでは小前提はいかなるものとして考えられているのであろうか。Cooper は行為における知覚の役割を「指示すること（pointing）」だと規定する<sup>(7)</sup>。彼によれば、知覚が指示していること（例えば「これは甘いものである」）がそのまま小前提としてすえられ、大前提において特定されているタイプの行為を「必然的に」行為者はなすことになる。この解釈の利点は、「思案（*Goal-seeking*）」と「行為の三段論法」を区別することで、「行為の」三段論法の結論が（必然的に）行為である」と

行為者が見ているものは何か

いうアリストテレスの主張を曲げる必要がない、という点にある。思案について議論している『ニコマコス倫理学』3巻3章においては「行為の三段論法」は直接言及されておらず、三段論法自身は一見思案とは違った形式で後の6・7巻において登場している。また、思案の結果必ず（必然的に）行為するとは限らず、時間的に後になって実行される場合や、例えば快楽に負けて思案の通りには実行しないと考えられる（アクラシア）場合も、個別の行為のタイプ（例えば「甘いものは食べるべきである」）に比して、より上位の価値（「健康」「富」、更には「善い」「美しい」「快い」など）との連関の中で、大前提において問題を処理することができるのである。

行為の三段論法を思案の部分とはせず、区別することで上記のような解釈上の問題のいくつかを解決する提案は一考に値するものであると思われる。しかし、Cooper の難点は、小前提を極端に限定することで大前提の役割がアリストテレスの示す例と比べて肥大化しすぎる点にある。Cooper によれば、思案はある行為のタイプを結論として導きだすものであり、それが三段論法の大前提となる。これまで小前提だと考えられていた「方法・手段」さえも大前提の中に「タイプ」として含まれることになるのである。そして逆に、我々が今問題としている知覚の役割は、まるで電灯のスイッチのように問題の行為の目的や評価と関りなく、大前提において示される行為のタイプに含意される（最小限の）<sup>8)</sup> 形相を指示するのみであり、そのことよって（小前提が与えられ）行為（結論）が（必然的に）なされる、と説明される。

このような図式は、行為者の行為に先だつ態度ないし欲求を大前提とし、そこに個別に関する信念（小前提）が加わることで、人は因果的に行為するというような図式の一つの解釈たりうる。<sup>9)</sup> あるいはこの因果的図式自体、知覚が関る個別的な事柄は情報としてなら評価を含まないものとして措定することにならば都合はないように思われる。

これまで見てきたように、交換テーゼの支持者がある状況の下で大前提が思案され選択されると語る場合は、その「状況」は中立な情報として行為者に把握される。このことが行為における知覚をいかなるものと考えるかに大きく影響しているのである。なぜなら、状況を我々はまずは知覚を通じて把握するからである。確かに、知覚は個別にかかわり、個別は小前提

に入るべき項目である。<sup>(10)</sup>そしてその小前提は「可能性」に関してであり、評価(善)にかかわるのは大前提とされていると見なされている(『動物運動論』701a23-26)のであるから、知覚は評価とは結び付かないと考えられることになろう。しかしながら、この「善」と「可能性」という前提の区別は、あくまでも伝統的に「目的—手段型」と呼ばれてきた三段論法、すなわち交換テーゼの支持者が目的の連関ではより下位に位置すると考える「制作」を導くような三段論法的前提を直接指しているとは解することができる(701a16-25)。そうであるなら、まだ個別の事柄に関しても、そして知覚に関しても検討の余地があるのではないか。

それでは、こうした知覚が行為の構造においてどのような役割を果たしているのかこれから見ていくことで、交換テーゼの射程を問うことにしよう。というのも、行為の三段論法が本来説明能力を持つためには、我々の現実の行為の構造のうちそれが機能していなければならない。つまり交換テーゼが正しく位置付けられるためには、実際の行為の構造に後付けられなくてはならないからである。

## 2

行為は生き物の自己運動である。そして自己運動の主人は「たましい・こころ」に他ならない。アリストテレスによれば、生き物を場所的に動かすたましいの能力・機能の候補は欲求能力と思惟能力との二つである。我々は何かを欲するとき行動をおこすし、またそうするのがよいと考えた時にもそれを為すことができるからである。だがさらに『デ・アニマ』3巻10章ではそれら二つのうち一つだけを挙げるとすれば欲求能力のほうが生き物を動かす能力であるとされる(433a21)。なぜなら、思惟が生き物を動かす能力として働く「実践的な思惟・思考」であるには、その終わりが行為の始まりであるだけでなく、その出発点(ἀρχή)が欲せられるもの(τὸ ὁρεκτόν)でなければならない。従って、欲求にしても思惟にしても「欲せ

られるもの」によって動かされているといえよう。そして、その「欲せられるもの」を対象とするのは欲求能力なのである。しかし注意すべきは、アリストテレスが示唆する運動・行為の原理において思惟が動かす能力・機能として消えてしまっていない、という点である。すなわち、自己運動の主人である「たましい・こころ」の能力・機能は尚、欲求と思惟である。思惟と欲求のかかわりは、「欲せられるもの」が始源であるという点にある。

さて、この欲せられるものはそれぞれの生き物においては思惟されることによってか見えるようにさせられることによつて (*τῶν νοηθῆναι ἢ φαιραθῆναι*) 与えられる (433b11-12)。こゝではまず、「見えるようにさせられることによつて欲せられるものが与えられる」という場面を、人間以外の動物の運動についてのアリストテレスの説明を検討することで確認することにしよう。

人間と人間以外の動物が対比されて語られる場合、人間以外の動物は知覚・感覚にもとづいて自己運動する、と言われる<sup>(12)</sup>。例えば目の前に食べ物があれば、直ちに食べる。その場合、目的となつた目の前のものは食べられるものであることが何等かの仕方と判別されていなければならない。しかし「食べることができるといふのは知覚の固有の対象(「色」「音」「味」等)ではなく、明らかに何等かの判別を前提としている。また、その判別にしたがつて、動物が「見ている」のは確かに欲求の対象となるような「食べ物」なのである。このように、単に知覚しているというのではなく、「見ている」ことが欲求対象の現前として「食べ物を食べ物として見る<sup>(13)</sup>」という事情であること、このことを適切に説明できるようなたましいの能力が「パンタシア (*phantasia*)」であろう。言葉を持たない生き物には思考能力はない。よつて食べ物を判別する能力を思考に帰すことはできない。しかし何等かの判別がそこに存するのである。

この「食べ物を見ている」ことはその動物を(「食べる」といふ運動へと)動かしているように見える。そうだとすると、パンタシアは自己運動の主人であるような能力の三つ目の候補ということになる。しかし、パンタシアの「判別する」という側面は思考と共通している。よつて、パンタシアを一種の思考だとすれば候補は欲求と思惟・思考という二つの能力の



ままである(433a9-10)。また、パンタシアに動かされて動物が、先の例で言えば「食べる」場合、パンタシアは欲求なしに動かしているわけではない(433a20-21)ので、動かす能力としての欲求の位置付けにも変化はない。すなわち、最初に動かすものは欲求されるものである(433b11)。アリストテレスは、このように運動の究極の原因が欲求であると述べる際に、その欲求を適切に準備するのはパンタシアであると指摘する(『動物運動論』702a17-19)。「適切に準備する」(*κατασκευάζει ἐπιτηδεύει*)<sup>15</sup>というのは、「能動―受動」の関係が成立していて、その上で作用を受けたものがそれ本来の(広い意味での)運動を始めるということである。欲求を動かすものは欲求対象に他ならないから、パンタシアは欲求能力に対してその対象(の形相)を与える能力・機能であろう。そしてこの場合働きの順序として、欲求に対してパンタシアが先行している。生き物の(自己)運動は、常に何かへと向かって、且つまたパンタシアと欲求とを伴って存するのである(『デ・アニマ』432b15-16, cf. 『動物運動論』701a4-6)。欲求が能力ないし機能として働くためには、アリストテレスによれば、パンタシアがなければならぬ(433b28-29)。パンタシアの内実は「何かの現れ・表象(*φύρασις τῆς*)」である。現れは「知覚の状態(*αἰσθησις*)」<sup>16</sup>とは違って「質料(*ὑλὴ*)」がなく(433a9-10)、それゆえパンタシアは知覚が成立している場合のみならず、実際の知覚が成立していなくても例えば記憶の能力とともに働いて知覚対象を現前させることができるのである。パンタシアが知覚能力によつて動かされ、知覚状態から質料を除いた形相を取りだすその操作において、何等かの判別が働いていると言わねばならない。この判別能力が、欲求に先行するのである。

右の言葉を持たない動物の例の場合、見ているということが欲求を呼び起こし、そして欲求対象自らは動かされることなく、生き物を動かしている。その上、たとえ擬似的にであれ、行為の三段論法を作ってみることができる。すなわち、大前提は「食べ物は食べるべきである」。小前提は「これは食べ物である」。そして結論は「食べる」という運動(行為)である。行為の生成の場面では小前提にあたるような個別に関する認識が、生き物の場合パンタシアとして、先行している。このパンタシアは「知覚を通じてか、思惟を通じて生じる」(『動物運動論』702a19)。こうしたパンタシアを「知覚的パンタシア」

αἰσθητικῆ φαντασία」と「思惟は言葉を持つ生き物の働きだ」という意味で「ロゴスのパンタシマ(ἡ λογιστικῆ φαντασία)」と名前をつけ区別すれば(『デ・アニマ』433b29-30)「これまで見た例は「知覚的パンタシア」の例ということになる。知覚的パンタシアは人間を含めたあらゆる生き物が持つものである(同上)。

知覚的パンタシアの場合、そこで見ている対象は欲求対象として現れていて即「欲望」(ἐπιθυμία)と直結している。それゆえ対象は「欲せられるもの」「生き物にとって)望ましいもの」であり、対象である見られているものと「望ましい」「善い」という評価とを区別するのは難しいと思われる。なぜなら見ている対象は、同時にある種の判別によって選ばれた欲求対象でもあるのだから。それゆえ、欲求や広い意味での選択が動かすときには知覚ないしパンタシアに即して生き物<sup>(19)</sup>を動かす、と言われるのである(『動物運動論』701a4)。しかしこの場合、パンタシアの内容(「現れ」)は大前提において表現される欲求を動かした、という働き以上の意味を持たない点では、「見る」ことを単に情報として扱う交換テーゼの理解する小前提となら変わらない、と反論されよう。結局はその生き物の持つ「空腹のときは食べるべきである」というような具体的な欲求次第なのであり、個別の事柄を評価に関して参照することはないのだと。

それでは言葉を持つ生き物(人間)においても同様の構図なのであろうか。その場合知覚的パンタシアと区別された「ロゴスのパンタシア」がいかなるものにかかっている。そのことを以下考察することで、人が行為者として行為するときに見ているものが何か、という問いに答えることにしよう。

3

「ロゴスのパンタシア」といわれるものは、明らかに言葉の働きと切り離せないものとしてある。さて、先の例(知覚的パンタシア)においても、目の前のものが「食べ物である」ことについては真偽を問うことができる。パンタシアは一種の

判別能力であった。しかし、それが真（「食べ物である」）であつても偽（「食べ物であると見えていた」）だけでそうではなかつた）であつたとしても、欲せられるものであることに変わりはなく、欲求能力ないし動物に対する働きの点では同じである。言葉を持たない生き物が見たものは、（この場合「欲求（*pothēsis*）」の中でも「願望（*Boulēsis*）」などと區別して）「欲望」と直ちに結び付き、生き物を動かすのであつた。しかし、例えば将来の結果を思惟したりする場合、ロゴスは欲望に異を唱えることができるのである（433b5-10）。ここさらにアリストテレスは「ロゴスのパンタシア」を「思案的パンタシア（*Bouleutikḗ pantasia*）」と言い換えて、ロゴスのかかわりが推論や思案という形をとつてあることを示す（434a7）。

ところで、「何かを思惟していても行為したりしなかつたり、運動したりしなかつたりするのはなぜか」という「動物運動論」7章で行為の三段論法を導入する際の問い（701a7-8）に対して、交換テーゼは一つの答えを提出している。すなわち、知覚などによって与えられた個別の事柄や状況の中で、「善き生」であるとか「美しい行為」といったより上位の価値に照らして「どのように振る舞うべきか」（大前提）思案する。思案はあらかじめであつても、その場で為されるものであつてもよい。いずれにしても、ある状況の中でいかなるタイプの行為を「追い求める」（あるいは「避ける」）のか結論されるならば、大小二つの前提から直ちに行為がなされる。例えば、「目の前に甘いものがあるなら、それを食べるべきである」という大前提は、健康という観点からしてよくないので「目の前に甘いものがあるなら、それを食べるべきではない」がよき大前提であると思案する。そして「これが甘いものである」という個別の信念が得られれば、結論としての行為は「それを食べない」という記述の下でなされる。

これに対する我々の疑問は知覚の扱いに対してであつた。

ある事態に対して、それを追い求めるべきか避けるべきか選択し運動・行為をするというのが、アリストテレスが我々に示す生き物の自己運動の原理である。（実践的）思惟が生き物を動かす場合、思惟等の思考能力を持つたましいに（「現れ」）見えているもの（*tā phainōmena*）を善いものか悪いものとして、肯定したり否定したりするときには、避けたり追求した

行為者が見ているものは何か

りする」(『テ・アニア』431a14-16)といわれるように、避けるべきか追い求めるべきかは、個別のものがいかなるものであるかに関る。しかも見ているものが善いか悪いかが問われているのである。

先の節で我々は欲求に対してパンタシアが先行することを確認した。パンタシアは知覚を通じてか思惟を通じて生じるのであった。言葉を持ちそして思惟する動物をその思惟が動かす場合、思惟はある事態の多くの現れからそれが何であるか一つの考えを特定する(434a7-10)。思惟される対象は他でもありうるような、「為されうるよきである」(433a28-30)。言葉を持たない生き物が、目の前のものに即して、欲求を働かせ自己運動するのに対して、言葉を持ち思惟する生き物は、現前している事態に関連して、実践的思惟を働かせて行為する。すなわち、実践的思惟の働きは、まるで見ているかのようにたまたしい・ここらにおいて生じている現れや思惟の状態でもって、現前している事態に関して、これから起こり結果するであろうことを計算し、思案することにある(431b6-8, cf. 433b5-13)。この時、実践的思惟が現前している事態に対して問うていることは、現前している事態の何に注目し、そしてそれを如何なるものとして見るか、ということであろう。前節で述べたように、「現れ」とは、知覚状態から取り出した形相のことであった。そうすると、実践的思惟の現前している個別の状況への問は、例えば、単に目の前の食べ物、甘いものとして見るか、健康に悪いと考えるか、という問だけでなく、むしろそれよりも事柄としては先に、料理もあり酒もあり、そして友もいる。そういう現在において何に注目するのか、という問もあるのである。これらの問に答える時に、複数の現れが、文字通り現れるであろう。そしてその場合、見ているものが価値評価から独立であるとは考えられないのである。なぜならある事態を追うべきか避けるべきかの決定は、現に見えていることを参照しそれに問いあわせることが必要不可欠であるから。すなわち、ちょうど知覚が対象の快(あるいは苦)を主張するように、見ているその対象が、未来との関連の中で、「最大の」(μέγιστον)行為者にとってのよきであると、たましい・ここら(24)が思案して主張する時、ただちに行為者は追求する(あるいは避ける)。つまり、一般的に言えば行為をなすのである(431b9-11)から。否むしろ、見ている対象に評価が関っているからこそ、欲求対象として実践的思惟の出発点となりうる(433a18-20)

のである。

かくして以上のことから、わたしは例えば「甘いもの」に対して、それを食べるべきだとする人と食べるべきではないとする人とは「目の前のものが違つて見えている」、とさえ言えると考える。なぜなら我々が行為の際に「見えている」ことは欲求と相関関係にあり、すでに価値評価が含まれているからである。つまり、我々は確かに個別の事柄を見ているのだけれども、少なくとも行為に際しては、それは単に情報として知覚しているのではなく、行為者にとつてよきものないし悪しきものとして見ているのである。

ところで、アリストテレスは、「我々は個別の事柄（小前提）が明らかである場合には立ち止まつて考えたりせず、直ちに行為する」（『動物運動論』1012a35-39）と述べている。確かに、我々が刻々に置かれている状況は、個別적으로는あるけれども、個別と言うにはあまりにも広く複雑で、そして豊かである。右記のごとく、そうした世界の中で何を見ているのかは、さらに問われるべき事柄であった。しかし、直ちに行為する時、明らかでなければならぬのは何も知覚対象ばかりではない。前提として、「習慣」にしろ何等かの「規範」にしろ、一般的な判断が決まっていなければならない。しかしながら、繰り返せば、いかなる大前提が要請されるかは状況や個別のものをいかなるものとして捉えるかに依存している。すなわち、いくら一般的法則を知つていても、それが状況のうちに見いだせなければ、思惟もその一般的判断に即して生き物を動かすことはできない。例えばそれは、数学のテストに際し、たくさんの公式を知つてはいるが文章題が解けないでいる学生の抱える問題である。我々は個別の問題の中に一般的な公式を見いだせなければならぬのである。行為はあくまでも個別のな出来事であり、その中で一般的普遍的な事柄が実現されるのである。

かくして、個別に関する信念（6）と普遍にかかわる信念とを比べて、どちらかといえば個別にかかわる信念が動かず、とアリストテレスは述べる（『デ・アニマ』434a19-21）のである。

行為者が見ているものは何か

これまでの考察でも明らかなように、我々ひとの行いや振る舞いは、実践的思惟の働きにおいてだけでなく、その出発点である「見る」ということにおいても言葉とともにある。アリストテレスはそれを「ロゴスのパンタシア」ないし「思案的パンタシア」と呼んだ。そして、我々は自らの行為をその始めから語ることができるのである。

わたしが今立っているこの場所で、何を見ているのかは問われるべき事柄である。というのも、いかなる仕方でも世界と関わっているのか、あるいは関るのかという問いは、行為者である我々自身が自らの行為に際して問うていることであると思われるのである。「見る」ということがすでにそうした関りの中にある。我々は自らが為した行為について、「なぜ」と問われて、その時そこで「見ていたもの」を語ることが一つの答えとなるのである。

これまでの考察の結論として、我々が行為者として見ていることと行為の三段論法の小前提の記述にはずれがあることを指摘しなければならない。一方で三段論法の大小二つの前提で表現される命題は、「行為者の持つ信念(*τινατινεν*)」を表現している(434a16-21)。我々はそれに対して真偽を問うことができる。他方、行為者自身を動かしたものは個別の事柄であるが、それは行為者の性向や価値判断、そして欲求と独立ではない。すなわち、善悪が問題となっているのである。そうであるなら、知覚は小前提のみならず大前提にも関ると言わねばならない。このことは『ニコマコス倫理学』の6巻で考察される行為にかかわる知識の構図<sup>(26)</sup>にむしろよくあてはまると思われる。よき人、すぐれた人が持つといわれるそれらの知識は、繰り返し「個別にかかわる」と語られ「知覚」にたとえられる<sup>(27)</sup>。

だが最後に、交換テーゼが最も期待していた一般的なよい行為について、多少の見通しをつけておこう。アリストテレスの定式によれば、行為の三段論法の前提は「これこれの人はこれこれのことを為すべきである」(大前提)「これはこれこれ

のことであり、且つまた、わたしはこれこれの人である」(小前提)となる(43a17-19)。我々はもはや、「よい行為はよい人の為すこと」という仕方では「よき人」を一般化して探求をはじめめる方向での提案を受け入れることはできない。むしろ、個別の事柄と、そしてわたし自身のあり方とをよく見ることから出発しなければならないのではなからうか。「よい」というのは何よりもまず、「わたしにとってよい」ということであり、様々な規範や助言に従うということとは、そうした個別の把握抜きにはありえないからである。<sup>(28)</sup>そしてそれは現実の場面においては物事が「見える」ということであると思われる。

このことから、そしてこれまでの考察からしても、よく生きることを願うものはまず、いにしえの人に倣って、「主よ、見えむことなり」と祈るのである。

## 註

- (1) 本稿ではそれを「見る」ということで代表させることにする。
- (2) 私がここで問題としている三段論法は次の二つの解釈を除外し念頭に置いていない。すなわち、三段論法の結論を(行為の)「命題」とする解釈(Charles [1984])と、「未来への意図」とする解釈(Sherman [1987])である。これらはいずれも結論を「行為」とはしない点で共通である。そしてその点で、それぞれ検討すべき論拠が挙がってはいるが、結局「結論は行為である」というアリストテレスの明言(『動物運動論』701a11-13, 『ニコマコス倫理学』1147a25-28)に反している。アリストテレスが考案した行為の三段論法が、行為の三段論法として、なされた行為を説明できるためには、実際に前提にあたるものが行為を導いていなければならないであろう。尚、引用文献は論文文末参照。
- (3) 手段が目的の構成要素として目的から切り離すことができない、という考えは Wiggins [1975] において強調される論点。特にその中の第2節参照。
- (4) cf. his chap.1 pp.1-88.
- (5) 「規範―事例型」と呼ばれる推論の例は、「乾燥した食物はすべての人間が食べるべきものである」(大前提)、「これは乾燥した

- 食物であり、私は人間である」(小前提)「私がこれを食べる」(行為)、『ニコマコス倫理学』1147a10。「目的―手段型」の例は、「私は身にまとうものが必要である」(目的―大前提)「コートは身にまとうものである」(コートが必要である)「私は必要なものを自ら作るべきである」(コートが必要である) (以上、「目的へと向かう事柄・手段」)「私はコートを作る」(行為) (『動物運動論』701a17-20)。
- (6) 『ニコマコス倫理学』6巻4章参照。「厄介である」というのは、ギリシア語においては、「行為する」と訳されているプラッティン (*prattein*) と「制作する」と訳されているポイエイン (*poiein*) との間に、少なくとも何かを「為す」という点で明瞭な用法の違いがあるわけではないからである。それゆえ逆にアリストテレスの区別の意味ないし意義が問題になるのである。
- (7) pp. 25-26, 46-58
- (8) 『アトキンエイヌス』27ff. cf. His Appendix pp. 183-6
- (9) この図式が真に因果的で、必然的に行為を結論とするために Davidson [1970] は「意志」という第三のものを要請した。しかしアリストテレス自身は「二つの前提から」必然的に行為がなされると考えていることは疑いようがない。
- (10) 『ニコマコス倫理学』1147b10
- (11) 『デ・アニマ』433a8-10 『動物運動論』700b18-19および『形而上学』1072a26-27参照。以下の生き物の運動・行為の分析は『デ・アニマ』3巻10-11章の解釈をもとにしてゐる。
- (12) cf. 429a4-8
- (13) 知覚は「これがパンである」「それは一度よく焼けている」というような「個別の事柄 (*ta kath' hekasta*)」を認識する」とも言われる (『ニコマコス倫理学』1112b34-1113a2)。だが他方、そうした見ている対象が欲求や(実践的) 思维の対象でもある、ということがなければ「動かす」とはいわれない。独立した能力としての知覚は「動かす能力ではない」(『デ・アニマ』432b19-21)。
- (14) (食べ物を食べ物)「として見る」というパンタシアの理解については Nussbaum [1978] pp. 221-269を参照。ただし筆者は彼女の論を全般に渡って支持しているわけではない。特に、『デ・アニマ』3巻3章をパンタシアに関する中心的なテキストだと



- は見なきないことには反対である。だが、パンタシアが一種の判別能力であり、また、ある場面では何等かの仕方での思惟やその他の能力・機能と結び付いている点で、Nussbaum が解するような「として見る」という働きも担うと考えられる。
- (15) パンタシアが他の独立に働く能力とともに働く能力であるという点。さらにそこでの働きが、パンタシアが関るそれぞれの能力に、「知覚対象」と外延の等しい「現れ」をその能力の対象として提示することであるという点。以上の二点については Wiggins [1988] の、特に第2章参照。
- (16) 「知覚の状態」とは知覚器官に生じている知覚のことを指すと考えられる。すなわち、知覚においては「知覚対象はそれぞれの知覚器官に即して我々の内に知覚を生じさせる。そしてそれらによって生じさせられた状態(*καθός*)は、知覚が現実態になったときだけでなく、知覚がすぎ去ったときにも知覚器官に存する」(『夢について』459a24-28)。
- (17) cf. 428b10-17, 428b30-429a2
- (18) アリストテレスは「欲求(*ὄρεσις*)」と使われよう。cf. 433b31-434a3
- (19) 「知覚的パンタシア」(『エ・アニア』433b29, 434a5-6)
- (20) もちろん、限定なしによいことと、その人にとってよいあるいはよいと現れることとは区別される(例えば『ニコマコス倫理学』1152b26-27)。しかし「行為者にとつて」はいずれも同じ役割を果たす。すなわち、行為者にとつてはいずれもよいことなのである。『動物運動論』700b28-29『自然学』195a24-26 = 『形而上学』1013b26-28『エウカ』146b36-147a11
- (21) 『動物運動論』701a8-20参照
- (22) この仮定は、アリストテレスの出す例には出てこない。付加した意図は、小前提にあたる個別的な事柄が何であるのか、いかなるものであるのかによって導引される大前提が限定されている、そのことを示すためである。
- (23) 「多くの現れから一を作る(*ἐκ ἐκ πλείονων φευραγαγάρων ποιεῖν*)」(434a9-10) の「一(*ἓν*)」を Hicks [1907] p. 567 などは「現れ・表象(*τὸ φαντασμά*)」であるとす。しかし、現れは必ず何かの現れであり、何かの対象ではない。cf. Wedin [1988] pp. 82-84, 142-146。こゝは文脈上実践的思惟の話であり、(実践的)思惟の対象(*τὸ νοητόν*)が「一」(『形而上学』990b24) なることを指していると考える。すなわち結論は行為である。
- (24) 431b8-9 *ἐκεῖ* *νὴ φευραγάρων* の解釈は Hicks pp. 539-540 に準つてゐる。

- (25) ハッペの「信念 (*ἰσχυρία*)」とソソの「知能 (*ἐπιστήμη*)」「判断 (*δόξα*)」「実践的知能 (*φρόνησις*)」を含むような概念をめぐって使われる (427b24-26)。
- (26) 特ダの-11章
- (27) 例えの巻 巻 1142a23-30, 11章 1143a32-b5, 9-14
- (28) 『ニコマコス倫理学』 1141b14-23 の「種」の例を参照。 cf. 1146 b35-1147 a10.

引用文献

- Charles, D. [1984], Aristotle's Philosophy of Action, Duckworth
- Cooper, J.M. [1975], Reason and Human Good in Aristotle, Hackett
- Davidson, D. [1970], How is Weakness of the Will Possible?, in his *Actions and Events* [1980], Oxford U. P.
- Hicks, R.D. [1907], Aristotle's De Anima, Cambridge (reprinted in 1990, Olms, Hildesheim)
- Nussbaum, M.C. [1978], Aristotle's De Motu Animalium, Princeton
- Sherman, N. [1989], The Fabric of Character, Clarendon Press, Oxford
- Wedin, M.V. [1988], Mind and Imagination in Aristotle, Yale U.P.
- Wiggins, D. [1975], Deliberation and Practical Reason, PAS (76), in Wiggins [1991] [1991], Needs, Values, Truth, (2nd ed.), Blackwell

(本学大学院博士課程・西洋哲学史)

行為者が見ているものは何か